

討論(一九九四年度第一回コロキウム)

著者	萩原 弘子, 浜田 和子
引用	女性学研究. 1995, 3, p.27-27
URL	http://doi.org/10.24729/00005004

討 論

(文責 萩原弘子)

討論では、在日朝鮮・韓国人女性たちから重要な問題が出された。特に浜田さんから報告があった在独韓国人および外国人の状況と、日本に在住する朝鮮・韓国人の状況の違いの大きさが指摘された。

たとえば参加者皇甫康子さんは、在独韓国人1世の女性の知人から、在日朝鮮・韓国人がまだ強い民族的アイデンティティをもっているのが羨ましいと言われたことに関連して発言された。在日朝鮮・韓国人はすでに2、3世が中心で、4世も生まれようというだけの歴史を重ねているが、在独韓国人の新世代である2世よりも強い民族意識をもっている。ドイツからの知人はそれを喜ばしいことと見たわけだが、在日たちの強い民族意識は日本社会の苛烈な民族差別があるからこそそのものだ。数世代にわたって在日しても、この社会を構成する市民としての基本的な諸権利はなく、日本社会が彼らのために用意しているのは同化の屈辱か、排除の屈辱、というのが現実である。そのなかで誇りをもって生きようとすれば、しっかりした民族意識をもつことにもなる。強い民族意識をもたずにはいられないようななかで保たれる民族性、民族文化は、女性にとっては時として抑圧的なものともなる。そういうご発言であった。

また浜田さんの発表のなかにあった、韓国人にも外国人法の適用を求めた運動に関連して複数の発言があった。日本には外国人の労働権や人権を守るための法律がなく、日独の朝鮮・韓国人がいずれも外国人、移民として人権を侵害されているとは言っても、彼我の状況は大きく違うことが出席者のあいだで確認された。また、世界各地にいる在外朝鮮・韓国人のなかで、在日者がもっとも劣悪な権利状況にあるという発言もあった。